欧州見聞の書状を読む

史料一　根岸友山・伴七宛清水卯三郎書状

（根岸家文書No.５１３９―２）

一書呈上仕候、春暖とハもふしなから
天竺海ハなつよりも暑気甚しく誠ニくる
し[ミ]ましたれど、まつさいはいに無事
アレキサンドリヤまて到着、御安心可被下候、
今十二三日にてフランスハリスまてまへり
ます、昨夜はしめて蒸気車にのり
ました、まことにかんしんなるものに
御座候、馬車より一二倍早く御坐候
三枚のかこにのるよりもらくなれとも
しごくゆれてがらゝさわかしく御坐候、
別紙久保宅にて新聞御覧可被下候、
余ハ後便、勿ゝ頓首

二月廿二日

甲山行

根岸友山様
根岸伴七様　　卯三郎

御一統様よろしく御願申上候

史料二　根岸友山・伴七宛清水卯三郎書状

（根岸家文書　№５１３９―１）

一書呈上仕候、春暖之節ニ御坐候へ共愈
御安康奉賀候、次ニ小生無事三月七日仏国
パリス府江到着仕候間、乍憚御安心可被下候、
博覧会場もいまた大半略出来にて全尾
不仕候、乍去英亜俄なとの器械をも大ニ
取始候処有之候ニ、実ニ驚嘆仕候、万国の
奇物名産一処ニ一観仕候事にて誠ニ
人智を増し候儀ニ御坐候、扨日本を出帆致候
両三日ハ波高くして舟動揺すによつて
穏座も難成候へ共印度海ハ平地
を行か如くニ御座候、乍去熱帯にて
二月始にて盛夏のとふりニ御座候、
釈迦仏の生処死処とも参り候へ共とも
誠に寥ゝたることニ御座候、此ニ大和尚二人
有リ、いつれも剃髪にて黄色の三布を
身体ニ巻、肩と腕ともを裸してとんと
羅漢の如し、月ニ四度説法ありといふ、
土人皆跣足なり、大和尚も同跣足なり、
土人皆仏帰依にて切支丹耶蘇抔
の宗旨無之由、此地椰子木檳榔樹
抔多くして皆之を喰ふ、檳榔樹を
喰するによつて歯黒く唇紅し、とんと
日本婦人の如し、立派のなりをしたる
婦人にても土足に御座候、役僧と相見へ候
浮屠家英語を話するによつていろゝ
通弁いたし和尚大ニ喜ひ候、乍去
土人ニ問へハ英の支配を受るものといふ、

扨ゝ一致せぬ事より人の支配を受る
に至り我国も顧るへきことゝ存候、いつれも
日本今日様子にてハ余程心配致ねハ
成ぬことに御座候、仏国の事抔ハ実ニ
談より大さふニ御座候、一日マルセールといふ
ところに宿し造船場に参り候処、実ニ
驚入候、ゲベル林砲礮の山ありて軍艦
輻湊中々驚ニ堪リ、日本も此の位ニ武
器を作るにハ今日の貧乏にてハ初先六ケ
敷奉存候、万縷帰国之上可申上候、勿ゝ
三月十日夜　頓首
清水卯三郎
根岸御伯父様
〃　伴七様
尚ゝ御一同様江よろしく奉願上候、扨又
御手紙被下候ハゝ極々細字にて薄き紙ニ御認
天王町江御届可被下候、なるたけ目方軽き方よろしく
此よりハ大体書状差上不申候間、御海恕可被下候

［封筒］
甲山　パリス府
根岸伴七様　清水卯三郎
要用